

近世寺院経営史の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 洋平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19731

2016年度 文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

近世寺院経営史の研究

学位請求者

田中 洋平

内容の要旨

1. 本研究の問題意識と目的

本論は、近世における寺院について、その展開過程や経営を分析することにより、この時代に特徴的な寺院の有り様や信仰世界を明らかにするとともに、そこから当該期における地域社会の位相を描写することを目的としている。

近世において多くの寺院は、宗判を梃子にして葬祭檀家を獲得することにより、その教線を拡大してきた。戦後辻史観を克服するべく進められてきた研究によって、この時代において盛んな布教活動が展開され、寺院と人々との密接な関係性が構築されたことも既に明らかとなっている。こうした関係から得られる収入が、寺院経営の一翼を担っていたことは確かであろう。それに加えて、例えば圭室文雄の論考を顧みるならば、近世における寺院は、宗判によって形成される葬祭檀家から以外にも神社の別当になるなどして収入を得ている。また三浦俊明による寺社名目金研究によって指摘されるように、寺院はそうした布教活動以外にも多様な諸活動を展開していたことも知られている。すなわち、近世における寺院は、宗判や寺請、葬祭以外にもさまざまな宗教活動を展開しており、かつまたそれ以外にも金融や農業といった経済活動に従事しながら当該寺院を経済的に成り立たせているものと考えられる。こうした点に鑑みるならば、従来の研究史のうえでも言及されてきた寺院の諸活動について、それらを総合して初めて当該期における寺院の存在意義、あるいは存立基盤が明らかにされるも

のと考える。換言すれば、寺院が展開する宗教活動をそれ以外の活動と同じ土俵で分析する必要があるのではないだろうか。

こうした視点のもとに、本論では近世という時代において、寺院が展開する多様な諸活動を経済的な営為として捉え直すことにより、その総体的な把握を試みる。すなわちここでは、寺院が展開する宗教活動を一つの経済的活動として把握し、他の諸活動と同列に扱うことにより、寺院の存立基盤を社会的存立基盤と経済的側面の両面から問い直していく。

併せて寺院を一つの経営体であると捉えるとき、寺院が当該期の時代的特質や社会経済状況に大きく左右される存在であろうことは当然推測される。寺院の存立基盤は、その寺院が立地する地域社会の有り様を濃く反映しているものとして再認識する必要がある。この点を考慮するならば、本論は、寺院を取り巻く社会経済的状况を踏まえたうえで、寺院経営を分析するとともに、近世における寺院展開や寺院経営をとおして、当該期の社会経済状況を分析するという双方向の視角を有することとなる。ゆえにここでは、近世地域史・村落史・社会経済史研究において積み重ねられてきた議論や分析結果を十分に踏まえたうえで論考を進めた。

2. 本研究の構成ならびに各章の要約

本論は、以下の七章および付論から構成されている。

第一章「幕末維新期の蝦夷地における新寺建立」は、江戸時代の蝦夷地に焦点をあてて、同地における曹洞宗寺院の建立実態を通観したうえで、幕末維新期に新規建立される寺院とそれ以前の寺院との比較を寺格の観点か

ら論じている。近世における寺檀制度は、この時代の寺院を分析するうえで看過することのできない制度的な枠組みであることは確かであろう。この点に鑑みて、本章では幕末維新期に本州以南の地から蝦夷地への恒久的移住が進む状況において、どのような性格をもった寺院が建立されていくのかを論証することにより、江戸時代初期に寺檀制度が形成されていく過程との比較検討の材料を提供できるものと考えている。言い換えれば、史料上の制約から未だ十分に詳らかにされているとは言い難い寺檀制度成立過程を幕末維新期の蝦夷地に見出そうとする試みである。ここでその過程を要約するならば、江戸時代中期以降の蝦夷地に建立された曹洞宗寺院は、その多くが葬祭や宗判を執行することのできない寺格の寺院であり、この地が本州以南に住む人々にとって恒住の場所ではないことを明らかにするとともに、幕末期の函館開港にともなって、恒久的移住者が増加することにあわせて、いわゆる「葬祭寺院」の建立が進められたことを立証した。

第二章「近世中後期の日蓮宗における信仰と寺院経営」では、下総国平賀（現千葉県松戸市）の日蓮宗本土寺に残された史料から、同寺の末寺・又末寺の寺院経営を信仰との観点から論じている。近世日蓮宗教団については、特に幕藩権力による不受不施派への弾圧が知られており、信仰上における他宗派への排他的特徴がこれまでの研究史のうえで明らかにされてきた。本章では、分析の俎上にのせた日蓮宗寺院の檀家数について、無住と現住とを分ける檀家数の境界線が二〇軒程度であり、従来指摘されてきた数字よりも大きく下回っていたことを確認した。また、檀家数とともに寺院経営の両輪であると考えられてきた寺院所持耕地についても確認したが、過少な檀家数を補うために寺院所持耕地を増加させていくといった、これまでの研究史において指摘されてきたような相関関係を確認することはできなかった。すなわち、本章でとりあげた日蓮宗寺院に関しては、寺院経営の両輪を十分に所持していないことになる。この点に関して整合的に説明するために、地域における信仰実態を寺院経営分析に組み込むことで、少数ではあるが熱心な檀家によって支えられた寺院経営像を示した。ここでは、寺院の所持耕地や散物銭以外にも、檀家の「質」それ自体が、寺院経営を左右することの可能性についても論点を拡大した。

第三章「近世北関東農村における祈禱寺院経営」は、常陸国黒子（現茨城県筑西市）の天台宗千妙寺に残された史料を用いて、同寺の配下において寺檀制度の枠組み

から外れた祈禱寺院の経営分析を試みた論考である。本章で論じられる眼目としては、近世の寺檀制度を所与の前提として議論が組み立てられがちであった近世宗教史研究にあって、そうした制度的枠組みの外にあった祈禱寺院に焦点をあて、その経営実態を明らかにするとともに、近世中後期における北関東農村の人口減少が寺院経営にどのような影響を与えたのかについて論じている。具体的には、同地域における近世中期以降の人口減少が、檀家収入のみならず寺院所持耕地の小作人不足という事態を誘発し、結果として多くの寺院が無住化に追い込まれていったことを論証した。

第四章「近世農村地帯における修験寺院経営」では、第三章と同じ視点をもちつつ、修験寺院の経営を掘り下げて論じている。具体的には武蔵国上寺山村（現埼玉県川越市）に存在した本山派修験寺院の林蔵院について、宗教活動による収入とそれ以外の収入に大別し、検討を進めた。その結果、修験寺院全体の収入のうち宗教活動によって得られるのは一割から二割程度であり、その他大部分は、所持耕地からの収入や金銭貸借によって得られる利息などが占めていたことを明らかにすることができた。ここから、寺院経営における宗教活動を経済活動全体のなかで相対化するとともに、宗教活動以外の収入によって修験者としての宗教活動が支えられていたという構図を提示した。

第五章「近世北関東農村における寺院資産の管理」では、第三章と同様に常陸国黒子の千妙寺に残された史料を用いて、荒地化した寺院所持耕地や境内地の材木といった寺院資産について、当該寺院が所在する村や村人、あるいはその本寺が如何に関わっていたのかという点を主題にして論じている。ここでは、特に無住化した寺院の資産がどのような関係性のなかで管理されていたのかという点を論じることによって、寺院の経営を取り巻く人的・社会的関係性に関する分析を進めている。

本章での分析からは、無住寺院について、実質的に村、あるいは村人によって寺院堂舎の管理がなされており、当該寺院が無住から現住へと転じたのちにおいても、寺院資産に関する管理権限が村方に保持されていた。この点に関して、現住と村方との間で発生した争いは、現住が退寺することで決着をみており、寺院資産の処分に関して村方の優位性を確認することができた。ただし、他方において寺院資産の処分決定権は田舎本寺が有しており、村方は無住寺院であっても、その資産処分の方法を田舎本寺に確認することが必要であったことを指摘した。

第六章「僧侶養成と寺格からみる近世曹洞宗寺院」は、上野・信濃両国の史料を中心として、寺檀制度との関連から曹洞宗寺院の実態を考察した論考である。近世における各宗派の寺院は、すべての寺院が寺檀制度の枠組みのなかで宗判や葬祭を執行したのではなく、そうした枠外にあって宗教活動を展開した寺院とそこに住持する寺僧の存在が想定される。本論ではすでに、第三章、第四章において祈禱寺院の分析を進めたが、本章では曹洞宗という同一宗派内での葬祭寺院、祈禱寺院の存在基盤を対比的に分析することを試みている。特に本章では、経営的に行き詰まった無住寺院の存在に焦点をあて、寺檀制度に照応する寺格と、そこに住持する寺僧の僧侶養成を関連させつつ、無住化の実態を明らかにしている。

第七章「近世新義真言宗寺院の無住化」では、武蔵国倉田村の新義真言宗寺院である明星院に残された史料の分析をとおして、同寺配下の寺院について、無住化の過程を明らかにしている。ここでは、前章と同様の視点から、新義真言宗寺院の無住化現象が顕在化してくる時期について、その分析を進めるとともに、どのような寺院に顕著な無住化がみられるのかという点に関し、寺檀制度とそれに照応する寺格の観点を考察の視野に含めつつ、論述を展開している。加えてそうした無住化が如何にして引き起こされるのかという点についても併せて論じている。

「おわりに」では、本論における検討結果を再度振り返り、信仰や地域社会の経済実態、あるいは社会関係などが寺院経営に与えた影響を総括するとともに、本論において積み残された課題を提示している。

なお、付論「林蔵院の宗教活動」は、第四章と関連し、修験寺院を営む宗教者の宗教活動について、修験者としての活動と村鎮守別当としての活動に分けて論じたものである。ここでは、経営体としての寺院のみならず、宗教者と当該地域社会との関わりを論ずることによって、議論の視野を広げている。